

I. 導入

おはようございます。エルサレムからガザ地区へ、そしてエジプトに続く古道を旅すると、最終的にはナイル川にたどり着きます。そこからさらにナイル川上流を目指して南下し、青ナイル川と呼ばれる支流をさかのぼっていくと、約3,200kmを経てエチオピアに到着します。



この道のりを制覇すれば、エチオピア北部にある聖ギオルギウス教会の礼拝に出席できるかもしれません。この教会は、エチオピア北部にある11の岩窟教会群のひとつです。これらの教会は、巨大な岩をくり抜いて作られた教会で、1000年近く前に建てられ、現在でも使われています。



岩をくり抜いて教会を作るには、想像できないほどの労力が要されたでしょう。しかし、さらに驚くべきことは、この教会が建てられている堀は、そのためだけに掘られたものだけということです。現地に行くと、教会の十字形の屋根を上から見下ろす格好になります。



現地のクリスチャンによると、キリスト教はイエスが死からよみがえられてからたった数年後にエチオピアに渡り、紀元330年には正式にキリスト教国家となったといわれます。イエスを信じる信仰は、イギリスやドイツ、および北欧の人々がイエスの名を耳にする何百年も前に、アフリカのこの地域に広まっていたのです。

驚いたことに、キリスト教信仰が最初にエチオピアに広まったのは、あるエチオピア人がちょうどよいタイミングでエルサレムを訪れていて、クリスチャンになったことが始まりのようです。では、使徒言行録8:26-40を読みましょう。

II. 聖書朗読 使徒言行録 8:26-40, (新共同訳)

8:26 さて、主の天使はフィリポに、「ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。 8:27 フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、 8:28 帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。 8:29 すると、「霊」がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒にいけ」と言った。 8:30 フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。 8:31 宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。

8:32 彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、口を開かない。 8:33 卑しめられて、その裁きも行われなかった。だれが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。」 8:34 宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」 8:35 そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。 8:36 道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょ

うか。」

8:37 (†底本に節が欠落 異本訳) フィリポが、「真心から信じておられるなら、差し支えありません」と言うと、宦官は、「イエス・キリストは神の子であると信じます」と答えた。

8:38 そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。 8:39 彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びにあふれて旅を続けた。 8:40 フィリポはアゾトに姿を現した。そして、すべての町を巡りながら福音を告げ知らせ、カイサリアまで行った。

III. 教え

主は、いろいろな方法で語られます。歌やみことば、日曜礼拝のメッセージ、友だちの言葉、夢や幻、そして、天使をとおして語られることもあります。この聖書箇所には、主が天使をとおしてフィリポに語られたとあります。そして、フィリポがみことばを語り、洗礼を授けていたサマリアの盛んな伝道の働きを離れて、エルサレムからガザに続く砂漠の道を南へ進むように指示されました。



サマリアで、フィリポは何千という人々に伝道していました。しかし主は、ひとりの人に伝道するために、彼を砂漠へと導かれたのです。**使徒 8:27a (新改訳)**「そこで、彼は立って出かけた。すると、そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の財産全部を管理していた宦官のエチオピア人がいた。」カンダケとは名前ではなく、称号です。また、当時エチオピアと呼ばれていた地域は、今のエチオピアと場所の誤差がありますが、文化や歴史についてはつながっていることもご承知おきください。とにかく、エチオピア人は高官であり、国の財産を管理するような仕事をしていたわけです。

このエチオピア人は、宦官でした。現代社会では、犬猫などのペットを去勢して繁殖できないようにすることはよくあります。現代では、人間にそのようなことをするのは言語道断と考えられています。しかし、古代ではよくあることでした。大昔の中国などでは、皇帝や王が宦官を使って、王国や帝国の重要な行政にあたらせました。宦官は子孫を残せないことから、子孫を王族にしようとして謀反を起こす心配もないだろうということで、忠実で信頼がおけると考えられていました。聖書の時代には、イスラエル近隣の多くの国々に宦官がいました。しかし、イスラエルでは宦官は珍しく、いても外国人でした。

この男性は、エルサレムに礼拝に行きました。ですから、彼がイスラエルの神を信じていたことがわかります。イスラエルの神を信じる異教徒が改宗してユダヤ教徒になることは許されていましたが、申命記 23:1 で宦官についてはこれが禁じられています。ですから、エチオピア人の宦官は、イスラエルの神を礼拝していましたが、ユダヤ教徒として神殿での礼拝に参加する権利はありませんでした。しかし、今日の聖書箇所から、彼がエルサレムを訪れた際に預言者イザヤの書を購入したことが推論できます。そしてまもなく、神が彼を他の人と同様に愛してくださっていることをイザヤの書から知るようになります。

イザヤ書 56:3-5 にはこうあります。「56:3 主のもとに集って来た異邦人は言うな／主は御自分の民とわたしを区別される、と。宦官も、言うな／見よ、わたしは枯れ木にすぎない、と。 56:4 なぜなら、主はこう言われる／宦官が、わたしの安息日を常に守り／わたしの望むことを選び／わたしの契約を固く守るなら 56:5 わたしは彼らのために、とこしえの名を与え／息子、娘を持つにまさる記念の名を／わたしの家、わたしの城壁に刻む。その名は決して消し去られることがない。」

フィリポが人間の知恵で行動していたなら、サマリアの盛んな働きを離れて、子どもを残せない一人の外国人に伝道するために砂漠へ行くことはしなかったでしょう。しかし、主の道は人間の知恵や計画よりもはるかに賢明で良いものです。同じイザヤの書に、宦官はこのような言葉も読んだことでしょう。(イザヤ書 55:6-9)「55:6 主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに。 55:7 神に逆らう者はその道を離れ／悪を行う者はそのたくらみを捨てよ。主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してください。 55:8 わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり／わたしの道はあなたたちの道と異なると／主は言われる。 55:9 天が地を高く超えているように／わたしの道は、あなたたちの道を／わたしの思いは／あなたたちの思いを、高く超えている。

神からの特別な啓示がない限り、フィリポはエチオピア人の宦官が多くの人々の魂を勝ち取る熱心な伝道者になるとは知り得なかったでしょう。これは、エチオピアの教会伝承で伝えられていることであり、それを疑う理由もあまりありません。主は、私たちの予期しなかったことをなさいます。宦官は、血のつながった子孫を残すことはできませんでしたが、霊的な子孫をたくさん残すという祝福にあずかりました。私たちの証をとおしてキリストへと魂を勝ち取った人々は、ある意味、私たちの霊の子どもと言えます。

どう理由にせよ、あなたが子どものない男性なら、エチオピア人の宦官を見てください。そうすれば、イエスの良き知らせを分かち合うことで多くの子どもをいただけることがわかるでしょう。また、子どものいない女性は、イザヤ書 54:1 のみことばを見てください。福音を伝えることに人生をささげるなら、このみことばがあなたのものとなるでしょう。「54:1 子を産まなかったうまずめよ、歌え。産みの苦しみをしなかった者よ、声を放って歌いよばわれ。夫のない者の子は、とついだ者の子よりも多い」と主は言われる。」(口語訳)

ないものばかりに目を向けると、気落ちして暗い気持ちになります。けれども、神が与えてくださった祝福に目を向けるなら、今のままで充実した人生を送ることができます。もし配偶者が与えられて、子どもを授かったら、主に感謝です。しかし、配偶者が与えられなかったり、結婚しても子どもを授からなくても、主をたたえましょう。子どものいない人たちは、子育てにかかる時間と労力を、多くの霊の子どもをイエスへ導き、魂を勝ち取るために使えます。それは、神の栄光のためです。

使徒パウロは、これらのことについてコリント第一 7:32-34 で語りました。「7:32 思い煩わないでほしい。独身の男は、どうすれば主に喜ばれるかと、主のことに心を遣いますが、7:33 結婚している男は、どうすれば妻に喜ばれるかと、世の事に心を遣い、7:34 心が二つに分かれてしまいます。独身の女や未婚の女は、体も霊も聖なる者になろうとして、主のことに心を遣いますが、結婚している女は、どうすれば夫に喜ばれるかと、世の事に心を遣います。

独身か既婚者かにあまり重きをおくべきではありません。むしろ、私たちが今置かれている状況で、主に仕える機会が与えられていることを喜ぶべきです。エチオピア人の宦官は、神のみことばに心を開き、同胞たちにイエスの福音を分かち合う機会という報いを得ました。この宦官は、イエスの良き知らせを聞いた後、自分が宦官であることを嘆いたりしなかったでしょう。計り知れない祝福が与えられていることを、きっとわかっていたと思います。

彼はどれほど驚いたことでしょう。彼は、馬車に乗って、イザヤの書を学んでいました。馬車を運転しながら読むのはたいへんなので、おそらく御者がいたのでしょう。この宦官も、私たちと同じように、教えてくれる人がいなくて、イザヤ書をなかなか理解できずにいました。すると突然、予想外のできごとが起こりました。使徒 8:30-31「8:30 フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、『読んでいることがお分かりになりますか』と言った。8:31 宦官は、『手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう』と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。」

私たちに何らかの必要があると、折りにかかって、神がその必要を満たしてくださいます。この場合、宦官は教えてくれる人を必要としていました。そこで神は、はるかサマリアの地からフィリポを連れてきてくださいました。使徒 8:32-33 「8:32 彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。『彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、／口を開かない。 8:33 卑しめられて、その裁きも行われなかった。だれが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。』」

この箇所は、イザヤ書 53 章の救い主に関する預言からの引用です。この言葉が宦官の心を引いたのかもしれませんが。何と云っても、彼は宦官になったときに卑しめと不正義を受けたのですから。このことで、血のつながった子孫を残せなくなったのです。はっきりとはわかりませんが、エルサレムで何を祈ったかと宦官に聞いたなら、もしかすると、自分の状況が奇跡的に改善されて、結婚して子どもが与えられるように祈ったと答えたかもしれません。しかし、神はさらにすばらしいご計画をお持ちでした。宦官の高官としての地位をキリスト・イエスの栄光のために用い、妻との間に作れるよりはるかに多い子どもを宦官に与えるというご計画です。

宦官は、エルサレムからの帰りでした。エルサレムでは、多くの人々が神殿で子羊をいけにえとしてささげるのを見たことでしょうか。しかし、先ほど言ったように、彼自身は自分の罪のために子羊をささげることは許されていなかったと思われまます。もしかすると、「私の罪を取り去ってくれる子羊はどこにいるのか」と思っていたかもしれません。彼のために、神はさらにすぐれた子羊、すなわち、この世の罪を取り去る神の小羊を備えてくださっていました。



使徒 8:35 「そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。」フィリポがどのようにエチオピア人に福音を解き明かしたのか聞いたらよいのにとお思います。イエスも結婚せず、子どももいなかったということを、フィリポは話したでしょうか。クリスチャンなら、神の愛の良き知らせを分かち合うことで、たくさんの霊の子どもを持つことができると話したでしょうか。私たちが天国に行ったら、フィリポがエチオピア人の宦官に聞くことができるでしょう。



どうだったにせよ、イエスが天から降りてくださった神であり、私たちの罪のために十字架上で死に、救いをもたらしてくださったことを、フィリポがこの男性に語ったことは確かでしょう。フィリポは、イザヤ書 53 章の救い主についての預言からそのまま語りました。この箇所は、イエスが神殿でささげられるいけにえの羊のように私たちの罪のために死んでくださったことが率直に述べられています。しかし、神殿でささげる子羊と違うのは、イエスが十字架上でささげてくださった命は完全ないけにえだったということです。ですから、信じる者すべてに完全な救いをもたらすために、たった一度だけささげられたわけです。



イザヤ書 53 章についてのメッセージを語る時間は今日ありませんが、フィリポが引用した箇所を少し読んでみましょう。私たちの罪のためにイエスが十字架上で死なれることを、このみことばが預言的に語っていることがわかると思います。イザヤ書 53:2-11

53:2 乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように／この人は主の前に育った。見るべき面影はなく／輝かしい風格も、好ましい容姿もない。 53:3 彼は軽蔑され、人々に見捨てられ／多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し／わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。 53:4 彼が担ったのはわたしたちの病／彼が負ったのはわた

したちの痛みであったのに／わたしたちは思っていた／神の手にかかり、打たれたから／彼は苦しんでいるのだ、と。 53:5 彼が刺し貫かれたのは／わたしたちの背きのためであり／彼が打ち砕かれたのは／わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって／わたしたちに平和が与えられ／彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。 53:6 わたしたちは羊の群れ／道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて／主は彼に負わせられた。 53:7 苦役を課せられて、かがみ込み／彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかった。 53:8 捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか／わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり／命ある者の地から断たれたことを。 53:9 彼は不法を働かず／その口に偽りもなかったのに／その墓は神に逆らう者と共にされ／富める者と共に葬られた。 53:10 病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ／彼は自らを償いの献げ物とした。彼は、子孫が末永く続くのを見る。主の望まれることは／彼の手によって成し遂げられる。 53:11 彼は自らの苦しみの実りを見／それを知って満足する。わたしの僕は、多くの人々が正しい者とされるために／彼らの罪を自ら負った。

宦官は、イザヤ書を読み、フィリポからメッセージを聞きました。そして、信仰をもって応答しました。

使徒 8:36-37 「8:36 道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。『ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるのでしょうか。』 8:37 フィリポが、『真心から信じておられるなら、差し支えありません』と言うと、宦官は、『イエス・キリストは神の子であると信じます』と答えた。」

大きな問題ではありませんが、37節が使徒言行録にもともとあったかどうかは疑問があります。それで、訳によっては、脚注に記載されている場合もあります。新共同訳には、使徒言行録の最後にこれが含まれています。

いずれにせよ、エチオピア人は洗礼を受けたいと願い、フィリポはイエスへの信仰を確認した後、同意しました。**使徒 8:38 「そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。」**教会によっては、新しく信徒になった人たちが洗礼準備の学びをすることを必須とする教会もあります。また、新しく信じた人の中で、あらゆる理由ですぐに洗礼を受けないことを希望する人もいます。しかし聖書には、新しい信徒は、たいていの場合、すぐに洗礼を受けています。

IV. 結び

キリスト・イエスにあって、エチオピア人の高官は罪の赦しと救い、そして生涯の使命を見出しました。妻子はいませんでした。二千年経った今でも、エチオピアにいる彼の霊の子孫に会うことができます。私たちが皆、イエスを知り、救いを受け、周囲の人たちにイエスの福音を分かち合うという偉大な決意をすることができますように。

私たちが皆、聖書の証を聞き、イエスを信じて永遠の命を受けるといふ招きに耳を傾けるよう祈ります。最後にヨハネ 1:29 をお読みします。「その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」

では祈りましょう。

V. 祈り

